

筑波大学附属図書館ラーニング・アドバイザーの活動

村 尾 真由子, 松 原 悠, 洪 昇 基, 佐 藤 良 太
秋 山 茉莉花, 金 瑜 眞, 嶋 田 晋
金 井 雅 仁, 浜 島 佑 斗

筑波大学附属図書館ラーニング・アドバイザーの活動

村尾 真由子, 松原 悠, 洪昇基, 佐藤良太
秋山 茉莉花, 金瑜眞, 嶋田 晋
金井 雅仁, 浜島 佑斗

抄録：筑波大学附属図書館では、平成24年度から大学院生をラーニング・アドバイザー（以下、LA）として雇用し、学生サポートデスクにおいて本学学生に対する学習支援活動を行っている。学生サポートデスクの利用者は年々増加している。平成25年度は、LAからの要望で定期的にミーティングが開かれ、アイデアを出し合う機会が増えた。これが契機となってLAの活動が活発化し、前年度の活動に加え新たに6つの企画を実施した。今後は、学生のニーズや学生サポートデスクの認知度の調査のような現状を把握する取り組みや、LAの相談対応の質を向上させる取り組みが求められる。

キーワード：筑波大学附属図書館、ラーニング・アドバイザー、学生アシスタント、学習支援、ラーニング・commons、ライティング支援、ピア・サポート

1. はじめに

筑波大学附属図書館（以下、附属図書館）では、平成24年度から大学院生をラーニング・アドバイザー（以下、LA）として雇用し、「学生サポートデスク」において、本学学生を対象とした学習支援活動を行っている。本稿ではこれまでのLAの活動を振り返り、今後の課題と展望について報告する。

1.1 LA 制度発足の経緯

1.1.1 2020 ビジョン検討ワーキング・グループの発足

平成20年度、筑波大学執行部において「筑波大学2020ビジョン」を策定する構想があった。これを受けて平成21年度、当時の附属図書館長より「本学のビジョンを踏まえた附属図書館の長期的な戦略が必要ではないか」という問題提起がなされた。また、電子ジャーナルの普及や資料電子化の加速、来館者数・貸出冊数の減少等の諸傾向より「図書館はもはや不要なのではないか」という雰囲気が見受けられるようになった。こうした「図書館不要論」に対する危機感も相まって、附属図書館では爾後10年間のグランドデザインを描くべく「2020ビジョン検討ワーキング・グループ」を発足させた¹⁾。

当ワーキング・グループは、本学開学以来の歴史・理念、教育宣言「筑波スタンダード」²⁾、本学の強み・弱み、附属図書館の歴史・取り組み等、本学及び附属図書館の歴史・現状を確認することから始めた。その上で、附属図書館の理念、存在意義、10年後の附属図書館像、目標及びアクションプランについて検討を行い、附属図書館がこの先担うべき役割や機能の可視化を試みた。約1年間をかけて

まとめられた成果は、諸般の事情から公式のものとはならなかったが、翌年度以降、主に学習支援の諸活動における重要な礎として、当ワーキング・グループで検討されたアクションプランや機能が活かされた。

1.1.2 ラーニング・スクエアの誕生

平成22年度、附属図書館は、筑波大学第2期中期計画（平成22～27年度）の重点施策として「カリキュラムやeラーニングコンテンツと連携し、学生の自発的な学習活動を支援する知的創造型エリア（ラーニング・commons）を設置するとともに、学生の多様なニーズに応じた場とコンテンツを提供し、来館、在館を促す学習図書館サービスを構築する」を掲げ、ラーニング・commonsの設置と学習支援サービスの強化に取り組むこととなった。

本学には中央図書館のほか4つの専門図書館（体育・芸術図書館、医学図書館、図書館情報学図書館、大塚図書館）がある。まずは中央図書館へのラーニング・commons設置を検討するため、平成22年5月に「ラーニング・commons検討ワーキング・グループ」を置いた³⁾。3年がかりの耐震改修工事が完了するタイミングであったため、ラーニング・commons設置に伴う施設の改修は困難であった。改修後の中央図書館本館2階は、ある程度学習支援機能を意識した構成となっていたため、同フロア全体をラーニング・commonsとして捉え直し、それぞれの「場」の役割を明確にすることで、エリア設計を行った（図1）。またラーニング・commonsの名称を「ラーニング・スクエア」⁴⁾とし、コンセプト設計を行った。

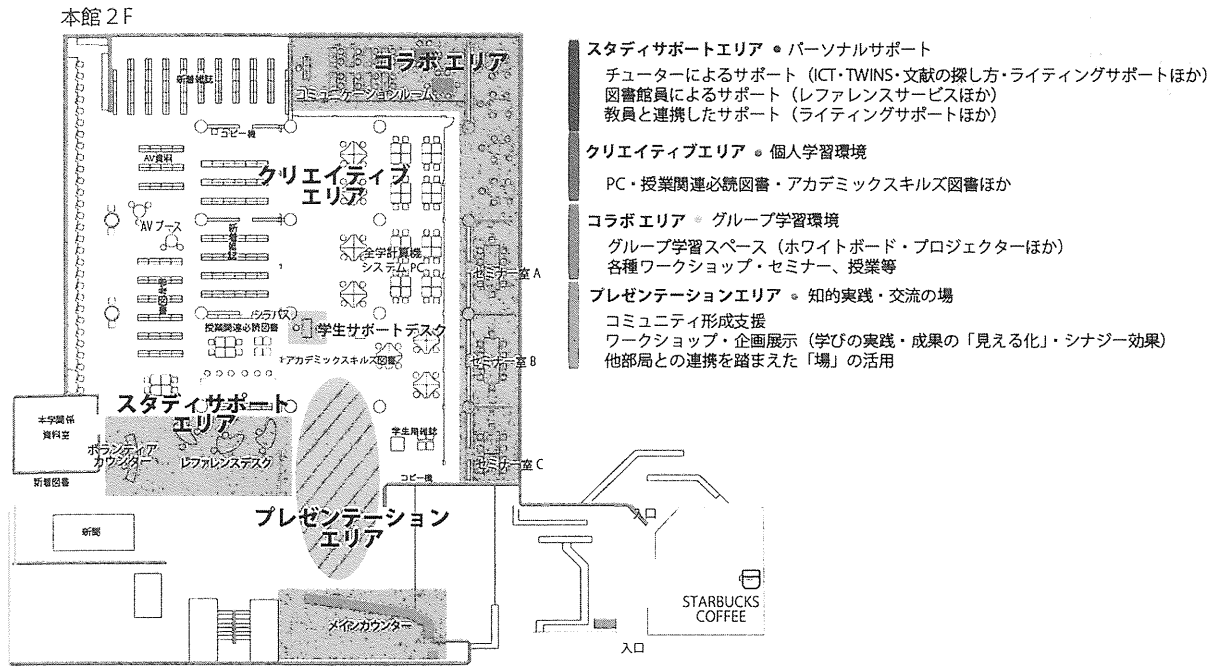


図1 ラーニング・スクエアフロア図 (平成23年度現在)

平成23年9月に開設したラーニング・スクエアは、「インプットからアウトプットまでの知的創造活動と、交流・協働のトータルサポート」をコンセプトとした学習支援環境である。「学生たちが気軽に集い、学び、教え合う学びの空間」、「多様な学習スタイルに応じて姿を変える万華鏡空間」、「学生同士の交流や諸活動の『見える化』により知的好奇心を刺激して、学びの相乗効果を生み出す空間」を目指している。

図2に示した通り、「インプットサポート」、「アウトプットサポート」、「知的実践・交流サポート」の中核に「人的サポート」を位置付けた。既存の人的サポートの担い手は、レファレンスデスクやメインカウンターで支援を行う附属図書館職員（以下、職員）及びボランティアカウンターで支援を行う一般市民による図書館ボランティアであった。学生のための更なる支援には学生による支援（ピア・サポート）が有効なのではないかと考えた。当時は国内のラーニング・commonsにおけるピア・サポートの成功事例がごく少なかったため、まずは平成23年5月から6月にかけて大学院生をモニタースタッフとして雇用し、学生サポートデスクにおける利用動向調査・需要調査を行った。併せて大学院生を雇用するにあたって必要な職員の体制を検討した。その結果を踏まえ、平成23年10月から平成24年2月の学生サポートデスク試行を経て、平成24年4月から正式に同サービスを開始した⁵⁾。

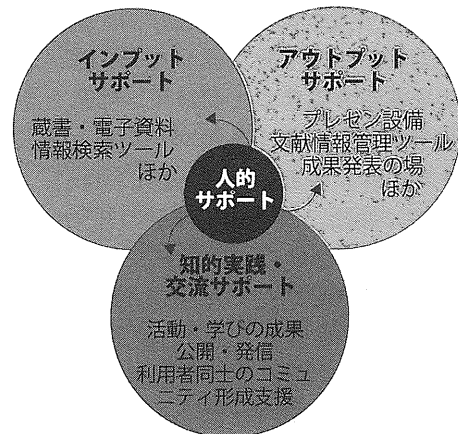


図2 ラーニング・スクエア構成要素

1.2 LA 制度の整備と採用及び運営体制

支援にあたる大学院生は、前述した平成23年度のモニタースタッフの段階から、ティーチング・アシスタント（以下、TA）と同等の身分・給与を持った非常勤職員として雇用されている。本学規則ではTAの採用が教育組織に限られており、教育研究支援組織である附属図書館ではTAを置くことができなかった。そのため平成24年度は内規「ラーニングアドバイザー⁶⁾の取扱いについて」（平成24年2月20日附属図書館長決定）を定め、これに基づき運用した。平成25年度からは「国立大学法人筑波大学本部等非常勤職員の勤務時間及び報酬に関する規則」⁷⁾（平成25年3月28日法人規則25号）に「ラーニングアドバイザー」の身分を規定

し、TA と同等の身分・給与体制を整備した。

LA は 4 月から 2 月までの単年度契約で公募され、修士課程・博士課程の別や研究科の別を問わず、単年度あたり 6~7 名が採用されている。LA による支援の水準をなるべく高く保つため、書類選考及び面接においては、高いコミュニケーション能力・英語能力・ICT スキル及び後輩の学習支援に対する熱意を持ち合わせていることを重視している。採用直後のデスク業務では、職員によって相談対応に関する初期教育が行われる。

ラーニング・スクエアを運営する組織の名称は、段階に応じて、平成 22 年度及び 23 年度は「ラーニング・commons 検討ワーキング・グループ」、平成 24 年度は「ラーニング・スクエア運営ワーキング・グループ」、平成 25 年度は「学習支援推進ワーキング・グループ」と変遷しており、その都度メンバーも入れ替わってきた。

大学院生によるピア・サポート導入以来、年度毎に改善を重ね、管理運営は落ち着いてきたところである。これまでの様々な活動を通して、職員と LA が連携して学習支援に取り組む体制を構築することができた。LA の諸活動においては、各人の個性・アイデアを尊重するよう心掛けていることから、年度毎に活動の特色が異なる傾向がある。第 2 章と第 3 章ではこれまでの LA の諸活動について LA が詳細に報告し、最後にまとめと今後の展望を記す。

2. 平成 24 年度までの活動・課題と改善の取り組み

2.1 モニタースタッフによる事前調査

平成 23 年 5 月から 6 月まで雇用されたモニタースタッフは、ラーニング・スクエアに対して附属図書館利用者が求めるサービスや環境の調査を行った。その結果、ラーニング・スクエア内に 61 台設置された本学学術情報メディアセンターの管理による全学計算機システム PC の利用方法の案内、留学生に対する英語での案内、グループ学習のできる場所、ライティング支援、気軽に聞ける環境等が求められていることが把握された。この結果を基に、学生サポートデスクの設置場所や役割、提供するサービスの範囲、LA が身につけるべき力等が見えてきた。

2.2 平成 23 年度の LA の活動

前述したように、モニタースタッフの活動を通して得られた利用者のニーズを勘案し、平成 23 年 10 月、ラーニング・スクエアに学生サポートデスクが設置された(図 3)。ここでは年間 32 週間余りの授業期間及び試験期間における平日 14~19 時に LA

が勤務し、学生サポートデスクにおける学習相談や附属図書館の利用方法に関する質問への対応と、ラーニング・スクエアの利用者数の定点観測といった業務を行う。LA は、学習相談等に対応するたびに、その内容を簡単に記録した。学生サポートデスクに寄せられた質問の大半は、モニタースタッフによる調査結果と同様に、全学計算機システム PC でのログインや印刷の方法と文献検索についてであった。

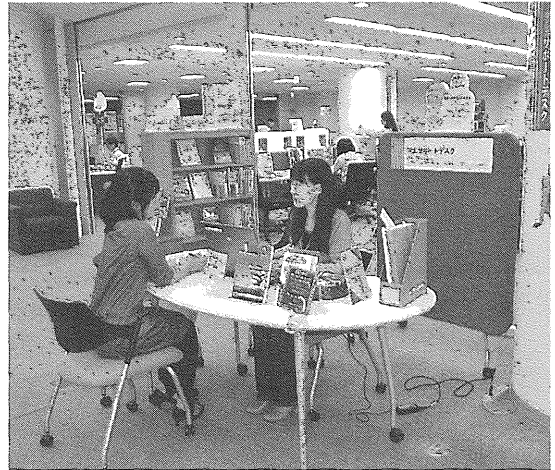


図 3 学生サポートデスクでの相談対応の様子

LA の広報には、附属図書館の広報誌「Prism」⁸⁾と、デスク上に置く自己 PR プレートを用いた。それぞれの広報物には、親近感のわく似顔絵を用いながら、LA 一人一人のパーソナリティや、どのような相談内容への対応を得意とするのかを伝える自己紹介を載せた。また、「生物、人文、感性デザイン、システム情報、教育等様々な分野の大学院生が利用者の質問に対応する」という趣旨が伝わるよう、LA の自己紹介には研究内容と、そのキーワードを添えた。

これらの業務に加え、LA は、学習支援を目的とする企画の立案・実施や、学生ならではの視点による附属図書館のサービスの改善及び利用促進への貢献を期待されている。平成 23 年度は、「ブクログ」というウェブ本棚コミュニティ⁹⁾を利用し『筑波大学附属図書館ラーニング・スクエア☆学習支援の本棚』と題したブックレビューページを開設した。これは、各 LA が学生の学習に役立つ図書を月に 1 冊以上選び紹介するものである¹⁰⁾。LA による企画展示を行う構想の下準備という狙いもあった。

2.3 平成 24 年度の LA の活動

平成 24 年 4 月、入学式直後の新入生履修ガイダンスに LA が出向き、附属図書館プロモーションビ

デオの上映及び職員による約10分間のオリエンテーションの後、2～3分間ほど学生サポートデスクの紹介を行った。

平成24年度の活動が平成23年度の活動と異なる点は、(1)利用者に対する「ライティング支援」の取り組みを始めたこと、(2)「Learning Adviser × Booklogの本棚」(以下、ブックログ本棚)という企画がLAによって立案・実施されたこと、(3)学生サポートデスクにおける相談対応のQ&Aを作ったこと、の3つである。

ライティング支援は、学生サポートデスクにおいて、レポート、論文、プレゼンテーション原稿等、学習に関する文章を対象として行うサービスである。相談者の文章の誤字・脱字を指摘するに留まらず、文章の内容が課題の目的に合っているか、文章に論理性や信頼性があるか等を、相談者との対話を通して検討する。相談に対応するLAのサポートスキルを向上させるため、青山学院大学大学院の小林至道氏(現・関西大学教育推進部特別任用助教)を講師として迎え、職員とLAを対象とした「ライティング支援セミナー」を9月に実施した(なお、このセミナーは平成25年度にもプログラムを一部変更して実施された)。また、文献検索に関するLAの研修には、附属図書館で一般利用者向けに実施されている、論文の探し方に関する講習会を利用した。

ブックログ本棚は、平成23年12月からLAが継続してブックログにレビューを投稿してきた学生の学習に役立つ図書を、実際にラーニング・スクエアに展示した企画である。この企画の目的は、附属図書館の利用促進と、LAおよびラーニング・スクエアの周知であった。LAによる紹介文やコメントを記入した見出し、看板、展示レイアウト、広報ポスターの制作はLAが主体となって行った。

最後に平成24年度のまとめとして、学生サポートデスクにおける相談対応の記録を基に、相談内容別のカテゴリ分けを行い、LAのためのQ&Aとして整理した。これによりLAになったばかりのスタッフが、以前の対応方法を効率的に参照することが可能となった。

2.4 LAのミーティングの問題点と改善

平成24年度までのLAのミーティングは、回数が少なく、職員の呼びかけによって不定期に開催されるに留まっていた。平成24年度は、当初は1ヵ月に1回程度の定期的なミーティングの開催を目指していたが、LA同士の日程調整が難しく、またLA全員が集まって作業する必要性のある企画がブ

ックログ本棚以外になかったため、年度の後期にはミーティングが開催されなかった。しかしながら、職員による過去2年間のLAに対するインタビュー調査の結果によると、デスク業務に関する情報交換、LA同士の繋がりの強化、新しい企画の立案といった点から、顔を合わせたミーティングを定期的に行った方が良いのではないかという意見が挙がっていた。

これらの意見を踏まえ、平成25年度は、デスク業務の他に、定期的なミーティングを開催できるよう、LAの勤務時間増加を想定した予算が措置された。結果として、平成25年度はミーティングを計18回開催した。表1は、平成23年度からのミーティングの概要について記載したものであるが、平成25年度のミーティングの回数が前年度以前に比べて飛躍的に増加していることが見て取れる。その他にも、勉強会や、LAの一部が集まって行われた作業、LA同士や職員との懇親会等を含めると、LA同士の接する機会は大幅に増加している。

ミーティングの日程及び内容についても、前年度までとは異なり、LAが自主的に設定した。平成25年度第2回のミーティングでは、それぞれがLAとしてデスク業務以外にどのような企画や活動を行いたいかというアイデアを出し合った。前年度までと比較して1年間を通してLA自身のミーティングを行うモチベーションが高かった要因の1つとして、第2回ミーティング内で1年間では達成しきれない程の企画案が生まれたことが挙げられる。企画の立案の過程で、デスク業務に関する情報交換や改善案の検討も行うことができた。

ミーティングには職員が同席し、対等な意見交換を行った。情報共有にはGoogleドライブを活用した。平成24年度は職員の主導であったのに対し、平成25年度はLAも積極的に、ミーティングの記録や企画のために作成したデータ等をGoogleドライブ上で共有した。これにより、LAの取り組みの進捗を確認することが容易になった。また、LAと職員の情報共有やコミュニケーションが円滑に行われるようになり、効率的な企画の立案・実施が可能となった。

3. 平成25年度のLAの活動

平成25年度のLAは、前年度のLAが実施した「ライティング支援」と「ブックログ本棚」に加え、新たに6つの企画(「広報活動」、「小技集」、「ライティング支援連続セミナーへの参加」、「大学図書館学生協働交流シンポジウムでの基調報告」、「学園祭でのオリエンタリング」、「プレゼンテーションセ

表1 LAのミーティングの概要(平成23年度～平成25年度)

年度	日付	回	内容
平成23	9月26日	第1回	顔合わせ、職員から業務の説明
	11月25日	第2回	デスク業務改善案、情報交換など
	1月12日	第3回	デスク業務改善案、質問など
平成24	3月16日	第1回	顔合わせ、職員から業務の説明
	6月7日	第2回	デスク業務を通しての感想、LA企画の提案
	6月14日	第3回	ブクログ展示のデザインの検討
	7月3日	第4回	ブクログ展示計画の検討
平成25	4月5日	第1回	顔合わせ、職員から業務の説明
	4月24日	第2回	デスク業務を通しての感想、LA企画案の洗い出し
	5月8日(勉強会)		昨年度のデスク相談記録の確認と、各LAの得意分野を共有
	5月15日	第3回	LA企画の提案を元に年間スケジュールの策定
	6月5日	第4回	学園祭企画と学内の修論・卒論の公開状況調査の進捗確認、小技集の公開方法の検討
	7月3日	第5回	ブクログ展示・小技集・学園祭企画の進捗確認
	7月31日	第6回	ブクログ展示・学園祭企画の進捗確認、島根大学におけるシンポジウム基調報告の内容検討
	8月2日	第7回	小技集・ブクログ展示の作業
	8月23日	第8回	ブクログ展示の選書・広報構想
	9月24日	第9回	ブクログ展示・学園祭企画の進捗確認
	10月16日	第10回	ブクログ展示作業、学園祭企画の進捗確認
	10月23日	第11回	学園祭企画の最終確認
	11月20日	第12回	小技集(LA紹介動画を含む)・プレゼンテーションセミナーの進捗確認、『大学図書館研究』投稿構想
	11月27日	第13回	プレゼンテーションセミナーの最終確認、LA紹介動画の進捗確認
	1月23日	第14回	LA紹介動画最終確認、来年度への引継ぎ項目の確認、『大学図書館研究』執筆分担
	2月12日	第15回	小技集の作業
	2月19日	第16回	小技集の作業
	2月24日	第17回	『大学図書館研究』原稿の確認
2月28日	第18回	『大学図書館研究』原稿の最終確認	

ミナー)を実施した。

3.1 広報活動

平成24年度の学生サポートデスクに寄せられた相談件数の中で、ライティングや学習内容に関する相談件数は8つの項目の中で最下位であった(図4)。このことを踏まえ、平成25年度は、「ライティング支援」を主軸とした学習支援を行う場所としての学生サポートデスクの広報活動を、年間を通して活発に行った。

具体的には、前年度と同様にPrismや自己PRプレートを用いた広報を行ったことに加え、各種のオリエンテーションやセミナー、授業の場を借りて、LAが自ら学生サポートデスクの広報を行った。その回数は、新入生履修ガイダンスとAC(アドミッションセンター)入試入学者懇親会で1回ずつ、各種の授業で3回、附属図書館が主催するライティング支援連続セミナー(3.3参照)で13回である。

新入生履修ガイダンスでは、附属図書館プロモーションビデオの上映の後、LA自ら作成した15分間のプレゼンテーションを用い、附属図書館や学生サポートデスクの活用法等を紹介した。その他、附属図書館主催のオリエンテーションの一環である館内ツアーで学生サポートデスクを訪れた学生に対しても、LA自ら学生サポートデスクの紹介を行った。

さらに平成25年度は、LAの立案により、新しい広報手段として学生サポートデスク紹介動画を作成し、平成26年1月28日に附属図書館のウェブサイト¹¹⁾に公開した。視聴者を飽きさせないように、学生サポートデスクを利用する場面がコミカルなドラマ仕立てで1分24秒間にまとめられた点がこの動画の特徴である。動画の最後には学生サポートデスクで受け付けている主な相談内容を記載し、紹介のまとめとした。

また、直接的に学生サポートデスクを紹介したわけではないが、学生サポートデスクを周知する効果

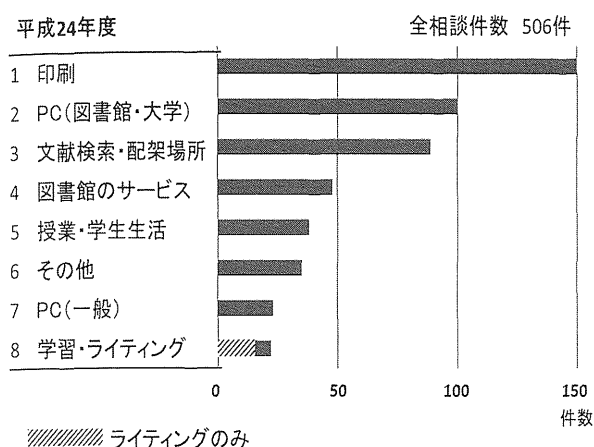


図4 項目別相談件数 (平成24年度)

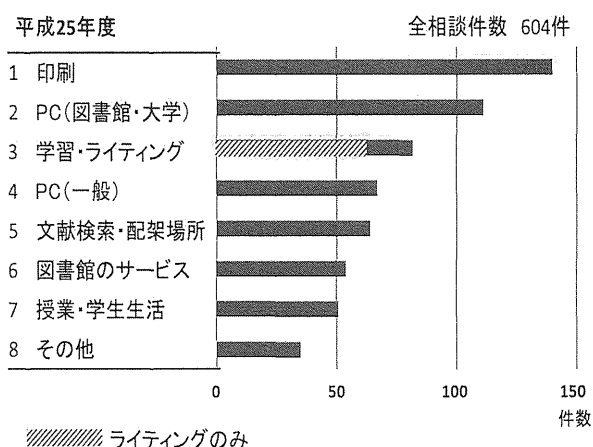


図5 項目別相談件数 (平成25年度)

【凡例】「印刷」：印刷機の使用手順や、紙詰まり等のトラブルに関するもの。／「PC (図書館・大学)」：筑波大学の全学計算機システム PC と図書館 PC それぞれのログイン方法や使用方法，学内メールシステムや履修登録システムへのログイン方法や使用方法，学内無線 LAN への接続方法に関するもの。／「学習・ライティング」：レポートの書き方や書いたレポートのチェック，授業で出された課題や研究の進め方，その他学習内容に直接関わるもの。／「PC (一般)」：Word, Excel 等の各種ソフトウェアや，メールサービス，文献管理ツール等の一般的なウェブサービスの活用法に関するもの。／「文献検索・配架場所」：文献検索の一般的な方法や，特定の文献を入手するために必要な情報に関するもの。／「図書館のサービス」：附属図書館内の設備や人的・電子的サービスに関するもの。／「授業・学生生活」：授業の履修，資格の取得，進学に関するもの。／「その他」：LA 制度に関するもの。附属図書館が行っていないサービスに関するもの。その他上記に含まれないもの。

が見込まれたものとして，つくば院生ネットワーク (3.6 参照) が附属図書館の協力を得て主催した，附属図書館エントランスで学生が自身の研究分野についてプレゼンテーションする企画「Monday Morning Institute」¹²⁾ の特別週間への参加¹³⁾ (平成25年4月22～26日)，ブックログ本棚の展示 (平成25年10月25日～11月27日；2.3 参照)，学園祭でのオリエンテーリング (平成25年11月3～4日；3.5 参照) が挙げられる。

平成25年度の項目別相談件数を図5に示す。学生サポートデスクにおける相談件数が前年度より100件近く増加したこと，特にライティングに関する相談件数が50件近く増加したことは，これら学生サポートデスクの広報活動と無関係ではないと思われる。

3.2 「小技集」の立案・実施

平成25年度第2回のミーティングでLAによって立案され，1年間を通して取り組まれた唯一の企画が「小技集」である。小技集は，LAの経験を活かして利用者にあまり認知されていないと思われる附属図書館の便利な機能を簡潔に紹介し，附属図書館ウェブサイトで公開することによって，利用者に附属図書館の機能を最大限に利用してもらえよう促進することを目的とする企画である。

例えば，中央図書館には，パソコンの各種ソフトウェアの使い方，レポートや論文の書き方，プレゼ

ンテーションの仕方が解説された図書を集めた，アカデミックスキルズ図書の本棚があるが，このことはLAの経験上，あまり認知されていない。このアカデミックスキルズ図書の本棚を簡潔に紹介し，附属図書館ウェブサイトで公開することによって，利用者がアカデミックスキルズ図書の本棚を利用する機会が増えると考えられる。企画への取り組みは，その都度LAミーティングを介しながら，次のような手順で行われた。

- (1) 利用者にあまり認知されていないと思われる附属図書館の便利な機能を挙げる
- (2) 各機能を利用者向けに簡潔に記述し，推敲する
- (3) 記述に地図・写真・動画を添えるかどうかを，各機能の特性に照らして決定する
- (4) 地図・写真・動画を作成し，検討する
- (5) ウェブページのレイアウトを作成し，検討する
- (6) 小技集を附属図書館ウェブサイトで公開する。

挙げられた機能は52に上り，各機能は150～250字程度で記述された。ほとんどの記述には地図が写真が添えられ，2つの記述には動画が添えられた。平成26年2月現在は(5)に取り組んでおり，職員による確認を経て平成26年4月に公開の予定である¹⁴⁾。

3.3 ライティング支援連続セミナーへの参加

附属図書館では、平成24年度から、学習支援活動の一環として、学内の4名の教員を講師として「ライティング支援連続セミナー」(以下、WS)を実施している。WSは、授業期間中の平日に1回あたり1時間、春学期と秋学期のそれぞれにおいて7回ずつ開催されている。参加者は学群生(学部生に相当)、大学院生、留学生と多様である。WSでは、レポートや論文のライティングの前段階に必要な執筆計画の立案から、執筆に不可欠な先行研究の批判的検討、さらに参考文献の正しい引用法や示し方に至るまで多岐に渡るスキルを紹介し、学生の“気づき”を促している。

職員の立案で、各回1~2名のLAが受講者として参加し、参加後、WSの様子について受講者の立場から体験記を作成した。体験記はPrismを通して公開している。PrismにLAの体験記を公開する目的は、(1)受講者の立場から親しみある生の声を配信することで、より多くの人に参加を呼びかけ、(2)WSに参加できなかった人や学外の利用者向けに、WSを疑似体験できるチャンスを提供することである。なお、体験記の公開にあたっては、WSに参加したLAが体験記を作成するたびに、内容に誤り等がないか、各回の担当教員に確認を依頼し、適宜、概念図やWSで撮影された写真、配付資料等を添えた(図6)。

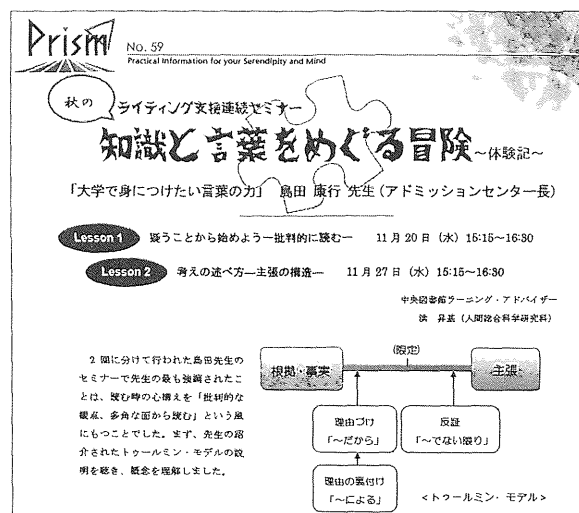


図6 Prismで公開している体験記

3.4 大学図書館学生協働交流シンポジウムでの基調報告

平成25年9月5日から6日にかけて島根大学ほかで行われた第3回大学図書館学生協働交流シンポジウム「私たちの手でつくり出す図書館の形一人を惹きつける空間を目指して」¹⁵⁾に、LA2名と職員

1名が参加した。本シンポジウムでは、大学図書館を利用者にとって快適な空間・サービスにするための取り組みや、大学図書館でのピア・サポートを行っている学生同士が、活動を報告し合い、人を惹きつける大学図書館をつくるために何ができるかを議論した。

LA2名は「ラーニング・スクエアにおける学習支援活動」と題して30分間の基調報告を行った。LAが学外で活動報告を行ったのは本シンポジウムが初めてである。基調報告では、始めにラーニング・スクエアとLAの概要を紹介し、次に学生サポートデスクにおける相談内容や件数の実態と、学生サポートデスク以外におけるLAの活動内容について紹介した。5分間の質疑応答では、学生サポートデスクのような形で学習支援活動を今後実施していく予定のある大学図書館の職員と、LAの活動を行うにあたり学生にかかる負担を軽減させる方法や、ライティングに関する相談件数を増加させる方法について議論した。

他大学の報告やグループディスカッション、島根大学附属図書館と島根県立大学おはなしレストランライブラリーの見学からは、大学図書館における学生活動の幅広い可能性、そして大学図書館そのものの多様性を知ることができた。例えばLAは附属図書館のラーニング・スクエアのコンセプトから創出された役割だが、他大学では、もっと利用しやすい大学図書館をつくりたいという学生の要望から始まった活動が多かった。そしてそのような主体的な学生らによって、学生に大学図書館を身近に感じてもらうために大学図書館からのお知らせを配布したり、図書貸し出し用のバッグを作成したり、利用者から本の見出しを募集してコンテストを開催したり、学習に特化した相談を受け付ける部屋を設けたりする活動がなされたという報告があった。これらの具体的な報告は、LAが附属図書館における学習支援の在り方を考えていくために参考となるものであった。さらに参加者からは、今後このようなシンポジウムを関東の学生を中心に行いたいという希望も出た。他大学での活動を知ることで、客観的な視点からLAの活動を省みた貴重な機会であった。

3.5 学園祭でのオリエンテーリングの立案・実施

LAの立案により、筑波大学の学園祭である「雙峰祭」(そうほうさい・平成25年11月2~4日)での附属図書館のオリエンテーリング(以下、OL)「大学図書館一本の樹海」を実施した。OLの目的は、(1)日頃あまり附属図書館に訪れることのない一般の利用者や高校生向けに附属図書館を体験し

てもらふこと、(2) 学内の学生向けに LA の宣伝を行うことである。以下に活動の詳細を企画の準備及び実施、参加者属性の集計結果に分け、報告する。

3.5.1 企画の準備及び実施

第2回ミーティングにおける「学園祭の企画として LA による附属図書館 OL を行おう」という発案から、学園祭開催期間のうち平成 25 年 11 月 3 日と 4 日の両日に OL を実施することが決定された。その後、LA から複数の企画案が提出され、投票により「大学図書館一本の樹海」をテーマとして OL を実施することが決定した。テーマ設定の意図は、附属図書館を「本の森」に見立て、楽しみながら探検してもらいたい、というものである。普段見過ごされがちな附属図書館の隠れたスポットに関するヒントを参加者に提供し、これらのスポットをチェックポイントとして附属図書館を探検してもらふことで、附属図書館をより身近な存在として体験できるようにした。各チェックポイントには、その場所に関する説明文と穴埋めクイズを記載したパネルを設置し、説明文を読めばクイズに解答できるようにした(図7)。さらに、クイズの正答数に応じて、附属図書館が独自に作成したクリアファイルや缶バッジといった景品も用意した。

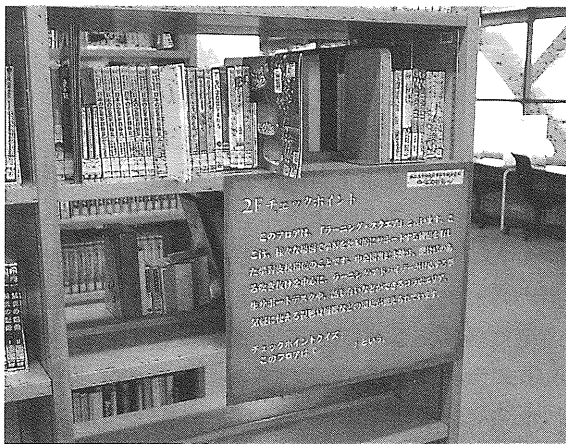


図7 オリエンテーリングのチェックポイント

OL のチェックポイントは、(1) 全てのチェックポイントを 20 分間程度で周ることができる、(2) チェックポイントは各階に 1カ所とする、という基準に基づき設定した。各チェックポイントを設置した場所は次の通りである。1 階：貴重書展示室、中 2 階：筑波大学の前身校である東京教育大学に所蔵されていた図書の棚、2 階：視聴覚資料エリア、3 階：国際交流コーナー、4 階：学位論文の棚、5 階：旧版教科書類の棚。

チェックポイントの説明文とクイズは、各 LA が担当部分を作成し、修正した上で完成させ、並行してパネルのデザインと解答用紙を作成した。OL 初日は、午前中に学習サポートデスクを附属図書館のロビー付近へ移動させ、チェックポイントのヒントも記載された解答用紙・附属図書館の地図・景品・鉛筆の準備を行った(図8)。両日 12 時～16 時に 2 名の LA が 2 時間ずつ勤務し、上記の解答用紙等を配付するとともに説明や景品交換を行った。LA が不在の時間帯でも参加者が自ら OL に参加できるよう、解答用紙等は説明書きとともに学習サポートデスクに備え付けておいた。

広報については、学園祭のパフレットに載せる文書と附属図書館に掲示するポスターを作成した。いずれも、担当者が制作した後、ミーティングで LA 全員が検討・修正して内容を決定した。

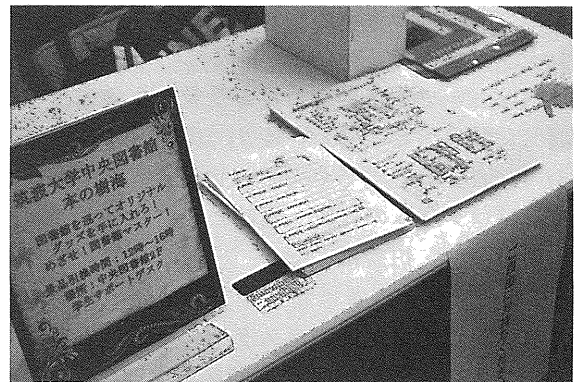


図8 オリエンテーリング時の学生サポートデスク

3.5.2 参加者属性の集計結果

OL では、解答用紙に参加者の属性を問うアンケートを記載し、155 名に配布した。2 日間で回収された解答用紙 112 件を集計すると、参加者の内訳は、小学生 9 名、中学生・高校生 15 名、筑波大学の大学生 30 名、他大学の大学生 6 名、筑波大学の教職員 2 名、その他 24 名、未回答 26 名であった。アンケートを提出しなかった者が 43 名いたが、少なくとも 54 名の学外者が附属図書館を利用し、OL に参加したことがわかる。

3.6 プレゼンテーションセミナーの立案・実施

平成 25 年度の LA の特徴として、筑波大学内の団体と協力した企画であるプレゼンテーションセミナー(以下、PS)を行ったことが挙げられる。その団体は、筑波大学や筑波研究学園都市の学術的風土を拡充するために平成 22 年に発足し、科学コミュニケーションの場を提供する活動を行っている、つくば院生ネットワーク¹⁶⁾(以下、TGN)で

ある。

附属図書館は、TGNの主な活動の1つである院生プレゼンバトルに注目した。院生プレゼンバトルとは、大学院生による異分野・一般の方向けの研究プレゼンテーションのNo.1を決める企画である¹⁷⁾。「多くの異分野コミュニケーションを活性化し、研究者以外の学生や一般市民も含めた科学コミュニケーションを図る」ことを目的とし、学園祭において平成25年2月現在までに3回実施されている。またTGNは、このような企画を実施することによって、発表者や参加者がプレゼンテーションの技術を向上させることも意図している。LA及び附属図書館は、大学生に研究プレゼンテーションの技術を向上する機会を提供することが学習支援活動の一環として捉えられることから、TGNと協働してPSを開催した。

PSは、「筑波大学No.1プレゼンターからプレゼンテーションの極意を盗む」というテーマで、院生プレゼンバトル2013の口頭発表部門とポスター発表部門において共に最優秀賞を受賞した山本晃平氏を講師に招き、平成25年12月25日15時30分から16時30分の予定で中央図書館集会室にて開催された。プログラムの作成・講師との打ち合わせ・当日の会場設営・司会はLAが、広報ポスターの作成はTGNが、大学内各事務室宛ての広報ポスターの送付及び附属図書館内のポスターの掲示は附属図書館が担当した。その他、附属図書館とTGNは、それぞれのウェブサイト、公式Twitter、Facebookページでも広報を行った。

当日行ったアンケートの結果によると、参加者は、少なくとも学生等55人、LA5人、職員13人、学外者1人の合計74人となり、会場は盛況となった。山本氏は、最初の15分間は院生プレゼンバトル2013口頭発表部門の最優秀プレゼンテーションを披露し、次の15分間に質疑応答を行い、そして最後の30分間に最優秀プレゼンテーションにおいて工夫した点を解説した。その後参加者からの質問が止まず、終了時刻は予定を20分間超えた16時50分となった。

参加者に対して実施したアンケートの結果を見ると、「今回のセミナーについてのご意見・ご感想をお聞かせください」という設問に対しては、「とても面白かったです！特に後半のプレゼン解説はすぐに真似したい情報がたくさんありました。とりあえずパワポで動画を入れてみると、ジョブズのプレゼンの本を読みます！」、「みんな悩んでいるポイントが同じなのかなーと思いました。ポイントを押さえて『ここだけは』と印象に残るプレゼンと

いうツボ、ヒントが分かったような気がします。うまい人のプレゼンをたくさん見ることは大事ですね」といった、参加者のこれからの意欲的な学習に繋がる回答が見られた。「図書館でやってほしい講習会・セミナーがありましたら教えてください」という設問に対しては、「プレゼンセミナー第2回もあれば参加したいです」といった、PSの継続的な開催を希望する回答が目立った。PSの開催によって、参加者に対して有効に学習を支援することができたといえる。

4. まとめと今後の展望

以上のように、平成25年度のLAは、前年度のLAが実施した「ライティング支援」と「Learning Adviser × Booklogの本棚」に加え、新たに6つの企画である「広報活動」、「小技集」、「ライティング支援セミナーへの参加」、「大学図書館学生協働交流シンポジウムでの基調報告」、「学園祭でのオリエンテーリング」、「プレゼンテーションセミナー」を実施した。これは、2.4で述べた通り、(1) LAからの要望で定期的にミーティングが開かれたことにより、LA同士が顔を合わせてアイデアを出し合う機会が増えたこと、(2) LA同士及びLAと職員間の情報共有・コミュニケーションが円滑に行われたことに起因する。その結果、年度当初に立てた計画のほぼ全てを遂行することができた。

ラーニング・コモンズにおける学生アシスタントの意義について、呑海らは「(1) サービス再考・創出の機会」、「(2) 学生のニーズの把握」、「(3) 質問しやすい環境の実現」、「(4) 学習の機会・実践の場の提供」の4つを挙げている¹⁸⁾。附属図書館では、このうち(1)及び(2)についてLAの意義が顕著に認められた。LA制度の導入により、学生ならではの視点によるアイデアを日常的に得ることができるようになり、学生自身の手によりそのアイデアを実現することができるようになったことは、LA及び附属図書館の双方にとって大きなメリットであったといえる。平成25年度の企画の成功が、ミーティング機会の確保という環境整備に依存するものなのか、あるいはLAの個性に依存するものなのかは明確ではないため、継続的に状況を見ていく必要がある。

普段のデスク業務については、3.1で述べたように確かに利用者は増加しているものの、学習相談への対応を始めとする主たる業務に費やした時間が少ないという感覚がある。1件の相談あたり正確にどのくらいの時間がかかっているのかも明らかになっていないが¹⁹⁾、長く見積もって平均20分間だとし

ても、年間 600 件の相談にかかる時間は 200 時間である。これは 1 日あたり 5 時間の勤務を週あたり 5 日間、約 32 週間にわたって行うという年間計 800 時間の勤務時間からみると、1/4 にしかならない。そもそもどのくらいの学生に学習支援のニーズがあるのか、またどのくらいの学生が学生サポートデスクで学習支援を受けられることを知っているのか等といった点が明らかになっていない。このような学生のニーズや学生サポートデスクの認知度等の現状を把握することによって、今後ますます広報を強化する必要があるのか、あるいは業務の見直しが必要なのかといった、これからの運営計画を立てることが可能となるだろう。

また、相談件数が増加したことにより、支援の質の向上について検討すべき段階に来ている。例えば、従来のように相談内容を簡単に記録しておくだけでは、LA の対応を相談内容別の相談件数という量的なデータによって把握することはできず、質的なデータによって把握することは難しい。相談対応の記録方法に工夫の余地がある。

LA は年度毎にメンバーの交代が生じる。このような条件の下で対応の質を保証するためには、LA の教育・研修に加え、先輩 LA を中心とする LA 同士の協力が不可欠である。例えば、平成 24 年度 LA が作成した学生サポートデスクにおけるラーニング・アドバイザーのための Q & A は、翌年度以降の学生サポートデスク業務に大いに役立った。また平成 25 年度 LA は、年度初めに各自の得意分野を共有する勉強会を開催したことにより、デスク業務において、自分より相談内容に詳しい LA への橋渡しを行うといった対応が可能となった。このような LA 同士の協力体制により、LA の経験や専門を活かした対応、及び質の保証・向上が期待できる。これらの活動を継続すると共に、相談者からのフィードバックや満足度調査のような新たな取り組みにより、支援の質の向上に関する更なる検討が可能となるだろう。

LA と同様に、学習支援推進ワーキング・グループにも職員の人事異動によるメンバーの交代がある。職員は LA の主体性をなるべく尊重する方針で LA の活動に関わっているが、全て任せきりにするのではなく協働するというのが、これまで思考錯誤しながら築いてきた運営体制の特徴である。学習支援推進ワーキング・グループの LA 担当職員は、学生サポートデスクにおける対応や各業務の進捗状況の確認、各 LA の業務負担の度合いや学業との両立への配慮、LA が気軽にいつでも職員に相談できる環境づくり等、LA の活動に対する目配り・気配り

を行ってきた。また LA と職員間の連絡・調整を行う役割も担った。これらは、LA と職員の円滑なコミュニケーションの一助となっていた。今後は、運営に関わるメンバーの交代により活動が活性化されるメリットを大事にしながら、引き継ぐべき面はしっかり引継ぎ、安定的なサービスの提供と、企画等を維持・発展させることができる体制づくりが必要である。

注・引用文献

- 1) 福井啓介. 3 フォーカス (2009 年度の特徴的な活動・事業) 6. 2020 ビジョン検討 WG 報告. 筑波大学附属図書館年報 2009 年度. 2010, p.10.
- 2) 筑波スタンダードとは、「建学の理念を踏まえて、教育の目標とその達成方法及び教育内容の改善の方策を含む教育の枠組みを明らかにし、本学の教育宣言として広く社会に公表するもの」である。筑波大学. “筑波スタンダード／大学・大学院教育フレームワーク”. 筑波大学. <http://www.tsukuba.ac.jp/education/tstandard.html>, (参照 2014-02-28).
- 3) 嶋田晋. 3 フォーカス (2010 年度の特徴的な活動・事業) 4. 中央図書館ラーニング・コモンズ検討 WG 報告. 筑波大学附属図書館年報 2010 年度. 2011, p.8-9.
- 4) ラーニング・スクエアを設置した成果については次の文献を参照されたい。筑波大学附属図書館. “成長する図書館 - ラーニング・スクエアでできるようになった 7 つのこと -”. 第 15 回図書館総合展ポスターセッション. パシフィコ横浜, 2013-10-29/31, 図書館総合展運営委員会. 筑波大学附属図書館, 2013, (ポスター), <http://hdl.handle.net/2241/120315>, (参照 2014-02-28).
- 5) 嶋田晋. 3 フォーカス (2011 年度の特徴的な活動・事業) 3. 中央図書館ラーニング・スクエア始動. 筑波大学附属図書館年報 2011 年度. p.10-11, 2012. / 斎藤未夏, 嶋田晋, 西島悠策, 福井啓介, 村尾真由子, 渡邊朋子, 渡邊雅子. 3 フォーカス (2012 年度の特徴的な活動・事業) 1. ラーニング・スクエアの魅力を紹介します!. 筑波大学附属図書館年報 2012 年度. 2013, p.4-7.
- 6) 規則上は「ラーニングアドバイザー」という表記だが、広報では「ラーニング・アドバイザー」という表記を用いている。
- 7) “国立大学法人筑波大学本部等非常勤職員の勤務時間及び報酬に関する規則”. https://www.tsukuba.ac.jp/public/ho_kisoku/s-02/2005hks11.pdf, (参照 2014-02-28).
- 8) Prism とは、Practical Information for your Serendipity and Mind の略称であり、附属図書館からの「知って得する」情報を紙媒体とウェブで配信する情報誌である。筑波大学附属図書館. “Home”.

- Prism. <http://www.tulips.tsukuba.ac.jp/prism/>, (参照 2014-02-28).
- 9) ブクログ, “ブクログー web 本棚サービス”, ブクログ. <http://booklog.jp/>, (参照 2014-02-28).
 - 10) 筑波大学附属図書館, “筑波大学附属図書館ラーニング・スクエア☆学習支援の本棚”, ブクログ. <http://booklog.jp/users/tulips>, (参照 2014-02-28).
 - 11) 筑波大学附属図書館, “学生サポートデスク”, 週5図書館生活, どうですか?, http://www.tulips.tsukuba.ac.jp/w5lib/?page_id=1870, (参照 2014-02-28).
 - 12) Monday Morning Institute は, 現在「プレゼンひろば」という同趣旨の企画に移行している。これら一連の企画については次の文献を参照されたい。つくば院生ネットワーク, “図書館“夜の”プレゼンひろば”, つくば院生ネットワーク. <http://tgn.official.jp/mmi/>, (参照 2014-02-28).
 - 13) つくば院生ネットワーク, “附属図書館ラーニング・アドバイザーによる MAINICHI Morning Institute! 4月22日~26日”, つくば院生ネットワーク. <http://tgn.official.jp/?p=1750>, (参照 2014-02-28).
 - 14) 投稿時点では未公開だったが, 平成26年6月4日現在, 以下のURLで公開している。筑波大学附属図書館, 中央図書館ラーニング・アドバイザー, “かゆいところに手が届く! 図書館小技集”, 筑波大学附属図書館. <https://www.tulips.tsukuba.ac.jp/lib/support/tips>, (参照 2014-06-04).
 - 15) 鳥根大学附属図書館, “第3回 大学図書館 学生協働交流シンポジウム 私たちの手で作り出す図書館の形 ~人を惹きつける空間を目指して~”, 鳥根大学附属図書館. <http://www.lib.shimane-u.ac.jp/9/sympo/2013.html>, (参照 2014-02-28). / 山口大学, “第3回 大学図書館 学生協働交流シンポジウム 私たちの手で作り出す図書館の形 ~人を惹きつける空間を目指して~”, 山口大学附属図書館. <http://www.lib.yamaguchi-u.ac.jp/LA/sympo2013/>, (参照 2014-02-28).
 - 16) つくば院生ネットワーク, “つくば院生ネットワーク”, つくば院生ネットワーク. <http://tgn.official.jp/>, (参照 2014-02-28).
 - 17) 石田尚, 善甫啓一, 上道茜, 松原悠, 埴生孝慈, 尾澤岬, 天野千恵, 榎田翼, 佐藤翔, 西浦ミナ子, 赤瀬直子, 三波千穂美, 逸村裕, 山田信博, 筑波大学における「院生プレゼンバトル」の事例報告~学園祭における科学コミュニケーション~, 科学技術コミュニケーション, 2012, no.11, p.63-73. <http://eprints.lib.hokudai.ac.jp/dspace/handle/2115/49447>, (参照 2014-02-28).
 - 18) 呑海沙織, 溝上智恵子, 大学図書館におけるラーニング・commonsの学生アシスタントの意義, 図書館界, 2013, vol.63, no.2, p.176-184.
 - 19) 平成26年1月からは, デスク業務においてそれぞれの利用者への対応にかかった時間を記録している。
-
- < 2014.3.24 受理 むらお まゆこ 筑波大学附属図書館情報サービス課主任, まつばら ゆう 大学院人間総合科学研究科教育学専攻, ほん すんぎ 大学院人間総合科学研究科感性認知脳科学専攻, さとうりょうた 大学院システム情報工学研究科リスク工学専攻, あきやま まりか 大学院生命環境科学研究科生物科学専攻, きむ ゆじん 大学院人文社会科学研究科文芸・言語専攻, しまだ すすむ 附属図書館情報管理課主任, かない まさと 大学院人間総合科学研究科心理専攻, はまじま ゆうと 大学院生命環境科学研究科環境科学専攻>

Mayuko MURAO, Yu MATSUBARA, Seungi HONG, Ryota SATO, Marika AKIYAMA, Youjin KIM, Susumu SHIMADA, Masato KANAI, Yuto HAMAJIMA

The activities of Learning Advisers in the University of Tsukuba Library

Abstract : The University of Tsukuba Library began to hire graduate students as Learning Advisers beginning in 2012 to staff the Student Support Desk and provide learning support services to University of Tsukuba students. The number of users at the Student Support Desk increased annually. In 2013, by request of the Learning Advisers, regular meetings were held to brainstorm new ideas. As a result, the activities of the Learning Advisers increased and they undertook six new projects.

We believe that in the future it is necessary to incorporate methods to survey student needs and awareness at the Student Support Desk as well as ways to increase the quality of interactions with the Learning Advisers.

Keywords : University of Tsukuba Library / Learning Advisers / student assistants / learning support / learning commons / writing support / peer support